



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	動補構造“V过1”の意味機能に関する一考察：“V完”との対照を通じて
Author(s)	楊, 安娜
Citation	研究論集, 12, 309(左)-322(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51974
Type	departmental bulletin paper
File Information	017_YANG.pdf



動補構造 “V 过₁” の意味機能に関する一考察

— “V 完” との対照を通じて —

楊 安 娜

要 旨

本稿は、現代中国語における動補構造 “V 过₁” の意味機能を、“V 完” と対照しつつ明らかにすることを目的とする。結論として、① “V 过₁” は「発話のコンテキストによって規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表すという意味機能を有すること、また② 上位一下位という「二重のイベント構造」が成立する場合に限り、“V 过₁” が生起すること、そのために、③ 「一つの動作行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表す “V 完” に比して、“V 过₁” の生起条件が主に発話のコンテキストによって規定されるという「語用論志向」という特徴を有すること、の三点を主張するものである。

はじめに

現代中国語における動補構造 “V 过”¹については、すでに数多くの研究が蓄積されている。しかし、“V 过” が具体的にどのような意味機能を有するかという問題については、未だ説得力のある説は提出されていない。そこで、本稿は、動補構造 “V 完” と対照しつつ、動補構造 “V 过” の意味機能及びその生起条件を明らかにすることを目的とする。

尚、本稿では〈完了〉を表す結果補語 “过” と経験アスペクトを表す “过” とは、二つの異なる形態素であるという立場をとる²。以下においては議論の便宜上、従来の慣習に従い、前者

¹ 動詞の後について、動作の〈完了〉を表す “过” を「動態助詞」或いは「助詞」と呼ぶ研究者もいる（郭春貴 1988, 孔令达 1995 など）。本稿はこの “过” はアスペクト助詞 “了” と共起できるので、讃井唯允 1996 などに従い、結果補語と呼ぶこととする。

² 経験を表すアスペクト助詞 “过” と動作の〈完了〉を表す結果補語 “过” は、同一の形態素と見なすべきだと主張する学者もいる（石毓智 1992, 吕叔湘 1980/1999 など）。一方、张晓玲 1986, 孔令

を“ $过_1$ ”，後者を“ $过_2$ ”と標記することにする。本稿では、このうち結果補語“ $过_1$ ”のみを考察対象として取り扱う。また、趨向補語の“ $过$ ”も考察の対象に含めないこととする。

1. 動補構造“ V $过_1$ ”に関する先行研究と問題点

本稿は、“ V $过_1$ ”の具体的な意味機能を明らかにすることを目的とするものであるが、その前に、代表的な先行研究において“ V $过_1$ ”のどのような側面が検討され、明らかにされてきたのかを概観しておきたい。

まず、“ V $过_1$ ”の統語機能上の特徴については、例えば呂叔湘1980/1999：246において、“ V $过_1$ ”は一般的な動補構造とは異なり「“ V ”と“ $过_1$ ”の間に“得”または“不”の挿入が不可能であり、また否定形もない」ことが指摘されている。“ V $过_1$ ”の動補構造としての特殊性が確認されたと言ってよい。

“ V $过_1$ ”の生起条件について検討した研究も少なくない。

张晓玲1986は、“ $过$ ”を動作の〈完成/終結〉を表す“ $过_1$ ”と〈経験〉を表す“ $过_2$ ”に分け、それぞれと動作の〈完成〉を表す“ $了_1$ ”との相違について考察している。そして“ $过_1$ ”に関して、①“ $过_2$ ”は過去の事柄を表すのに対して、“ V $过_1$ ”は過去、現在及び未来の事柄に用いられ、時制とは非関与的であること、②“ $过_1$ ”が連動式に現れる時に、ほとんど“ $了_1$ ”と置き換えられること、③両者が共起する場合、〈完結〉の意味が強まること、更に④“ $过_1$ ”は動補構造、瞬間動詞、状態動詞、形容詞と共起しにくいということを指摘している。

また孔令达1986は、〈完成〉を表す“ V $过_1$ ”と〈経験〉を表す“ $过_2$ ”の文法機能の相違について考察したものである。そのうち“ V $过_1$ ”については、①時制とは非関与的という张晓玲1986と同様の指摘をしたほか、新たに、②“ V $过_1$ ”は具体的な動作の完成を表すのに対して、“ $过_2$ ”は抽象的な一般的概念（原文は“一般概念”）を表すこと、③統語形式からみれば、“ V $过_1$ ”はアスペクト助詞“ $了_1$ ”，語気助詞“ $了_2$ ”及び時間副詞“已经”と共起できるが、“曾经”とは共起できないということを指摘した。さらに、“ V $过_1$ ”は複文における従節に述語として現れること、“ V $过_1$ ”はしばしば“后、之后、以后”などと組み合わせ、時間フレーズを構成することをなどにも言及している。

郭春贵1988：86は、“ V $过_1$ ”と“ $了_1$ ”の違いの解明を目的として、両者の交替条件について論じたものである。“ V $过_1$ ”の文法的意味については“ $过_1$ ”は“ $了_1$ ”より使用範囲が狭く、既知の情報や日常生活についての動作の完了に限って使える。文末に必ず語気詞か語気助詞“ $了_2$ ”を伴う。前後二つの動作がある場合は、前の動作の完了を表す時に使う」と整理し

达1995などでは、両者は音声形式と統語的分布条件の面で振る舞いが異なるのを理由として、二つの形態素として取り扱うべきだと反論した。本稿では仮後者の見解に賛同する立場を取る。

ている。

上述の研究は、主として“V 过₁”の生起条件を論じたものである。よって“V 过₁”の具体的な意味機能については必ずしも十分には検討されておらず、単に〈完成〉或いは〈完了〉を表すという表現にとどめられることが多い。しかし、これだけでは“V 过₁”意味機能を十分に解明したことにはならない。例えば、“V 过₁”の意味機能を〈完成〉或いは〈完了〉と表現しただけでは、本稿の例(15)～(20)、(21) a においてどうして“V 过₁”が生起できないのか、また例(6)～(7)において“V 过₁”がどうして〈完了〉あるいは〈終結〉を表す“V 完”と異なるニュアンスを付帯するのか、といった問題を解釈することができない。

無論、先行研究においても“V 过₁”の具体的な意味機能の解明は試みたものは存在する。以下、そのような研究のうち代表的な成果である朴鐘漢 1997/2000、朱繼征 1999、張岩紅 2006 をとりあげ、その成果および問題点について検討する。

1.1 朴鐘漢 1997/2000

朴鐘漢 1997/2000 は、認知理論の観点から、多義語である“过”を分析したものである。そのうち“过₁”については、次のような例文を挙げ、例文(1)において“过₁”のみが生起するのは、「一定の時間および空間的な經由過程」を表す連用修飾語の意味特徴にマッチするが、“完”は「単にできごとの終了を示す」からだと説明する。そしてこのことから“过₁”は動作の完結を意味するとともに、その背後では動作の進行過程を含意している」と理解できるとしている。

- (1) a. 他们把原稿一页一页的看过了。(朴鐘漢 1997/2000 : 32) (一部表記を修正)
(彼らは原稿に一枚一枚目を通した。)
- *b. 他们把原稿一页一页的看完了。

しかし、その一方で、「經由過程」の意味が常に文脈上に現れるわけではないとし、次のような例文の場合は、「純然と動作の完結のみを表している」としている。

- (2) 吃过了吗？(朴鐘漢 1997/2000 : 32)
(もうご飯を食べましたか。)

そして、“过₁”について「語彙的な意味が虚化して動作の〈完結〉を表す働きをする。そして、完結したできごと全体をかたまりと認識するようになる」と整理する。

朴氏の説は、“过₁”の意味特徴について「一定の時間および空間的な經由過程」を表す連用修飾語との共起関係に注目するなど重要な指摘を含むものであるが、どのような場合に經由過

程の意味が現れ、どのような場合に純然と動作の完結のみを表すのか、明らかにされておらず、“过₁”の意味特徴を十分に解明したものとは言えない。

なお、朴氏は“完”は単に出来事の終了を示すだけであり、“一頁一頁”などのような連用修飾語とは意味が整合しないため、共起できないとして上記の例(1b)を非文法的とするが、“完”が動作の進行過程の状態を表す連用修飾語と共起する例は少なくない。この点も問題であろう。³

- (2) 他一个字一个字地读完了《安妮日记》。(CCL)

(彼は一字一字『アンネの日記』を読み終えた。)

- (3) 老汉一笔一划地写完了诉状。(CCL)

(老人は一画一画丁寧に訴状を書き終えた。)

1.2 朱繼征 1999

朱繼征 1999: 120 は、“V 完”と“V 过₁”の相違について、「“V 完”と“V 过₁”の文法的用法は、動作の起動から完了までの過程をどのように捉えるかによって制約され、完了点を動作の起動から完了までの「線」状過程の〈終点〉として捉えた場合、“V 完”を用い、その過程を一つのまとまった「点」として捉えた場合、“V 过₁”を用いる」と指摘している。その根拠の一つとされるのが、以下の例文に対する朱氏の解釈である。

- (4) a. 满满的一瓶酒精都蒸发完了。(朱繼征 1999: 120)

(一瓶のアルコールが全部蒸発した。)

*b. 满满的一瓶酒精都蒸发过了。

- (5) a. 水桶里的水一滴一滴地漏完了。(朱繼征 1999: 120)

(水桶の中が一滴ずつ漏れてしまった。)

*b. 水桶里的水一滴一滴地漏过了。

例(4)と(5)について、朱氏は「動作完了の物量を総括する状語の“都”と動作完了の様態を描写する状語の“一滴一滴”の介在によって、同様に動詞の起動から完了までの過程は「線」として捉えることになるため、“V 完”と共起できるが、“V 过₁”とは共起できない」と分析する。しかし、「状語の“都”」や「状語の“一滴一滴”」のような修飾成分が存在しない場合、どの

³ 中国語の文の成否の判断については、筆者(30歳、女性、大連出身)及び以下の5名のネイティブスピーカーによる。①A氏、25歳、男性、大連出身、②B氏、26歳、女性、瀋陽出身、③C氏、30歳、女性、北京出身④D氏、27歳女性、成都出身、⑤E氏、33歳、女性、吉林出身。

ように使い分けるのか、明確な基準が朱繼征 1999 においては見当たらない。また朱氏の解釈は例(4)と(5)については成立するかのようであるが、同じく動作完了の様態を描写する状語が現れる下記の例については、朱氏の説によって解釈することが難しい。

- (6) a. 这些材料我们一页一页都看过₁了。
 (これらの資料に私たちはもう一頁一頁目を通した。)
- b. 这些材料我们一页一页都看完了。
 (これらの資料を私たちはもう一頁一頁見終えた。)
- (7) a. 一桌子菜我一盘一盘全都吃过₁了。
 (一つのテーブルの料理を一皿一皿全部食べた。)
- b. 一桌子菜我一盘一盘全都吃完了。
 (一つのテーブルの料理を一皿一皿全部食べ終えた。)

例(6), (7)には、例(4), (5)と同じように、動作完了の物量を総括する連用修飾語（“都”，“全都”）と動作の様態を描写する連用修飾語（“一页一页”，“一盘一盘”）が存在する。そして主語の“这些材料”（これらの資料），“一桌子菜”（一つのテーブルの料理）はいずれも物量を表すものである。朱氏の結論に基づけば、例(6)と(7)に現れる動詞が表す動作行為の起動から完了までの過程を「線」として捉えることになるため、どちらも“V 过₁”と共起できないはずであるが、実際はそうではない。例（6a）と（7a）は問題なく成立する。

1.3 張岩紅 2006

張岩紅 2006 は連語の観点から“V 过₁”と“V 完”⁴の意味機能の相違について以下のように主張する。（下記の表は張岩紅 2006：140 から引用）

“V 完”	—	出来事の運動終了の局面
	—	全体量の運動終了の局面
“V 过 ₁ ”	—	出来事の経過終了の局面
	—	部分量の経過終了の局面
	—	全体量の経過終了の局面

上記の表における「出来事」という用語について、張岩紅 2006：140 は「文中に数量の現れ

⁴ 張岩紅 2006 では“～完”と“～过₁”という表記を用いるが、本稿では“V 完”，“V 过₁”と統一する。

ない「動詞＋客体」の関係である」とし、また「全体量」と「部分量」について、「文中に数量の現れる「動詞＋客体」の関係である」と説明している。

しかし、「運動終了」と「経過終了」という二つの用語の違いは何なのかについて、張岩紅 2006 には具体的な分析が見当たらないため、“V 过₁”と“V 完”の意味機能を十分に説明したとは言い難い。

また、張岩紅 2006 では、用例(6)と(7)のような“V 过₁”と“V 完”のいずれも生起しうる用例における両者のニュアンスの違いに注目し、前者は「部分量/全体量」を表す数量詞と共起できるのに対し、後者は「部分量」を表す数量詞と共起できないと主張する。確かに、“V 过₁”を用いる場合は受け手の「部分量」が終了するニュアンスが含まれるのに対して、“V 完”を用いる場合は受け手の「全体量」が終了するニュアンスが含まれる。とはいえ、“V 过₁”と“V 完”の生起は統語上数量詞の制約を受けると断言するのは妥当であろうか。例えば、張岩紅 2006 では“V 完”は「部分量」を表す数量詞と共起できないという見解を立証するために、根拠として、以下の(8)と(9)を非文法的な用例として挙げる。

(8) *刚才吃完了点儿 / 几片 / 几口 面包。(張岩紅 2006 : 125)

(9) *这本书我看完了一些 / 几页。(張岩紅 2006 : 125)

しかし、上記の二例はいずれも統語的に成立し得る文である。

更に、仮に“V 完”は「部分量」を表す数量詞と共起できないという主張が正しければ、下記の用例について解釈できないことになる。

(10) 我吃完了一个苹果。

(私はリンゴを一個食べ終えた。)

(11) 十个苹果中我吃完了一个。

(十個のリンゴのうち、私はひとつを食べ終えた。)

上記の例(10)における“一个”は通常受け手の「全体量」と捉えられるのに対して、例(11)における“一个”は、受け手の「全体量」ではなく、「部分量」と捉えるのが自然である。張岩紅 2006 の分析によれば、(11)は非文法的なはずであるが、実際はそうではない。

“V 过₁”と“V 完”のいずれも生起しうる場合、なぜニュアンスの差異が生じるのかについて、本稿は両者の意味機能の差異によるものとする。以下、“V 完”と対照しつつ、“V 过₁”の意味機能を明らかにしていきたい。

2. “V 过₁”の意味機能についての仮説

本稿では、“V 过₁”の意味機能を、類似する意味機能を有する“V 完”と対照しつつ明らかにすることを試みる。具体的には、以下 2.1. ～ 2.3. に示すような言語事実に基づき、“V 过₁”の意味機能は「発話コンテキストにおいてに規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面を表す」ものであり、“V 完”の意味機能は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面を表す」ものだとする仮説を提出する。

2.1 “V 过₁”が生起する文法条件——「二重のイベント構造」が成立する場合

まず、“V 过₁”が生起する用例を検討してみたい。以下のように“V 过₁”が生起する場合、常に“V 过₁”の“V”が表す動作・行為が上位イベントを構成する下位イベントのひとつに相当するのである。言い換えれば、上位一下位といういわば「二重のイベント構造」が成立している場合に限り、“V 过₁”が生起するという文法条件が見出されるのである。

2.1.1 「二重のイベント構造」が狭義のコンテキストによって構成される場合

以下の用例を見てみよう。

- (12) A: 近两年的气候真不正常。去年五月份樱花开的, 今年怎么样?
(近年の気候は異常ですね。去年は五月に桜が咲いたのです。今年はどうでしたか。)
- B₁: 今年还比较正常, 四月份就开过₁了。
(今年は例年通りで、四月にもう咲いたよ。)
- #B₂: 今年还比较正常, 四月份就开完了。
- (13) A: 老王的病治了好长时间了吧? 好点儿了没有?
(王さんの病氣は治療が長いでしょう? すこしよくなりましたか。)
- B₁: 唉, 这西药也吃过₁了, 中药也吃过₁了, 连偏方都试过₁了, 就是不见起色。
(ええ、西洋の薬も飲んだし、漢方の薬も飲んだし、民間療法さえも試したけど、ずっと治らなくて。)
- #B₂: 唉, 这西药也吃完了, 中药也吃完了, 连偏方都试完了, 就是不见起色。

例(12)は具体的なコンテキストが設定された用例である。A と B は“櫻花开”(桜が咲くこと)という話題で会話のやり取りを行っている場面である。発話者 A は去年の桜の咲いた時期を知っており、今年は例年と比べ、桜の咲いた時期が早かったのか、遅かったのかという新情報を求めている。このコンテキストにおいて、「桜が咲くこと」が上位イベントとして規定され、

また「おとし桜が咲くこと」「去年桜が咲くこと」「今年桜が咲くこと」など、各年それぞれ「桜がさくこと」が下位イベントとして認識されている。Aは「今年の桜の咲いた時期はどうでしたか」と質問する前に、「去年は5月に桜が咲いたのです」という前提を持ち出しているのである。つまり、Aは「今年桜が咲くこと」を「桜が咲くこと」という上位イベントを構成する幾つかの下位イベントの1つとして認識している。会話のやり取りの「関係性の原則」によれば、人々が話をする時には「当面の状況と直接関連性のあることを話さなければならない⁵」ため、Bはこの上位イベントにおける下位イベント——「去年桜の咲くこと」、「今年桜の咲くこと」などの流れを念頭に入れて応答することによって、はじめて語用論的に適格となる。“V 过₁”は「発話コンテキストにおいてに規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す意味機能を有するため、上記のような上位イベント（桜が咲くこと）と、下位イベント（各年に桜が咲くこと）のいずれも成立しているコンテキストにおいては生起し得る。

一方、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表し、動作行為の内的展開に焦点を当てるため、例(12)では“V 完”が生起しにくい。

例(13)は(12)と似たようなコンテキストである。「王さんの病気の治療法」ということが上位イベントとしてコンテキストにおいて規定され、具体的な治療法（例えば、西洋の薬を飲むという治療法、漢方を飲むという治療法、民間療法など）がこの上位イベントを構成する下位イベントとして認識されている。Bは「王さんの病気の治療法」という上位イベントにおける下位イベントの各部分（それぞれの治療法）のつながりを認識したうえで、どんな治療法を施したのかを新情報としてAに伝達する。下位イベントの一つに相当する「治療法」が実現したという意味を表すには、“过₁”を用いるのが最も適切であろう。一方、“完”が生起する場合、「二重のイベント構造」が想定されにくい。単に“吃”という動作の内的展開の終結の局面を表すため、“吃完”で応答すると、不適格となる。

2.1.2 「二重のイベント構造」が広義のコンテキストによって構成される場合

本稿で言う広義のコンテキストとは、具体的な先行文脈ではないが、話し手と聞き手の共有の認識に基づいて想定されるコンテキストのことを指す。

- (14) A: 吃过₁了吗?
 (食べましたか?)
 B: 吃过₁了。
 (食べました。)

⁵ 柴谷等 1982: 130 を参照。

この会話においては、例(12)(13)と異なり、具体的なコンテキストはないにも関わらず、“V 过₁”が生起している。なぜなら、広義のコンテキストによって「二重のイベント構造」が構成されているからである。すなわち、会話の双方が同様な生活経験によって生じた共有の認識に基づいて、長い生涯において「食事すること」を上位イベントとして、そのうちの一回の「食事すること」を下位イベントとして捉える、ということである。つまり、話し手と聞き手の頭の中にはすでに「二重のイベント構造」が成立している。この場合、下位イベントの一つが実現したことを表すには、“V 过₁”を用いるのが妥当ということになる。なお、郭春貴 1988 : 86 に指摘される「“V 过₁”の主題は既知の情報（日常生活における規則的な動作を含む）でなければならない」という点についても、上例と同様に分析できるであろう。すなわち、主題が既知の情報（日常生活における規則的な動作を含む）である場合、上位イベントと下位イベントとが容易に想定されやすいため、“V 过₁”が生起しやすくなる、ということである。

2.2 “V 过₁”が生起し得ない文法条件——「二重のイベント構造」が成立しない場合

次に、“V 过₁”が生起できない文法条件を検討してみたい。以下に見るように、上位一下位といういわば「二重のイベント構造」が成立しない場合、“V 过₁”は生起できないという文法条件が見出される。

2.2.1 動作の[・]内的[・]展開[・]過程における状態を表す連用修飾語が現れる場合

以下の用例を見られたい。

- (15) *a. 女儿含着泪水读过₁了这本书。
 b. 女儿含着泪水读完了这本书。(CCL)
 (娘は涙ぐんでこの本を読み終えた。)
- (16) *a. (她) 终于以顽强的意志和高度的责任感坚持站过₁了这班岗。
 b. (她) 终于以顽强的意志和高度的责任感坚持站完了这班岗。(CCL)
 (彼女は強い意志と強い責任感を持って最後まで歩哨に立ちつづけた。)

例(15)と(16)は、一つの動作の内的展開の過程中的の進行状態（どのような状態を伴うのかということ）を表す連用修飾語が現れている。例(15)の“含着泪水”（涙ぐんで）は“读”（読む）という動作の進行状態を表し、例(16)の“以顽强的意志和高度的责任感坚持”（粘り強い意志力と強い責任感を持って）は“站岗”（歩哨に立つこと）という事象の開始から終結までの状態を表す修飾語成分である。いずれも「動作の内的展開」に焦点が当てられている。このように、「ひとつの動作行為の進行状態」のみを表す文においては、上位一下位といういわば「二重の

イベント構造」が構成され難いため、“V 过₁”は生起しにくい。それとは対照的に、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表すため、展開過程中的の状態を表す連用修飾語と共起できる。

2.2.2 動作の内的展開の持続時間を表す文法成分が現れる場合

以下の用例には「動作行為の持続時間量」を表す成分が現れている。

- (17) *a. 一顿饭花了半个小时才吃过₁。
 b. 一顿饭花了半个小时才吃完。
 (30 分もかかってご飯を食べ終えた。)
- (18) *a. 《红楼梦》我三天就看过₁了。
 b. 《红楼梦》我三天就看完了。
 (『紅樓夢』を私は3日間もかけて読み終えた。)

上記の二例には“半个小时”(30分)と“三天”(3日間)という「持続時間量」を表す文法成分が現れている。それぞれ動作行為“吃”(食べること)と“看”(見ること)が発生した時点から終了した時点までの所要時間を表す。用例に示されるように、「持続時間量」を表す文法成分が現れる場合、“V 过₁”が生起し難い。理由については、次のように考えられる。

“V 过₁”は、「語用論的に規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。しかし、「持続時間量」を表す文法成分が現れる文においては、動作の開始、展開、終結という「動作の内的展開」に焦点が当てられている。このことは、“V 完”の「動作行為の内的展開の全過程の終結の局面」を表すという意味機能と合致するため、“V 完”の成立は可能である。それに対して、“V 过₁”は、その生起条件である「二重のイベント構造」が成立し難いため、生起しにくいのである。

2.2.3 コンテキストによって動作の内的展開に焦点が置かれる場合

以下の用例を見られたい。

- (19) A: 你还在吃啊? 大家都在等你呢。
 (まだ食べているの? みんなあなたのことを待っているのに。)
 *B₁: 等我吃过₁这两口就去啊。
 B₂: 等我吃完这两口就去啊。
 (これを食べてからすぐ行くよ。)
- (20) A₁: 刚刚看你进食堂, 这么快就吃完了?

(今食堂に入ったところを見たが、こんなに早く食べ終わったの?)

*A₂: 刚刚看你进食堂, 这么快就吃过₁了?

B: 那还不快啊? 几口就吃完了。

(それは早いよ, 何口で食べ終えたのだから。)

例(19)では、次のような会話場面が想定される。すなわち「A は多くの人と B を待っていたが、B がなかなかこない。そこで、A が B の様子を見に行くと、B はまだ食事中であった」といった会話場面である。B は返事する時、無論自分の“吃”(食べる)という動作がすでに A に見られていることがわかっている。つまり、両者とも動作“吃”が「起点」からスタートして、現時点で「進行中」にあることを意識した上で発話している。A に“吃”という動作をいつ終結させるかという返事を求められている B が、もし“V 过₁”を用いて応答すれば、不適格となる。その理由はやはり「二重のイベント構造」が成立しないところにある。

また例(20)も同じように考えられるであろう。A は B が食堂に入っていたところを目撃していることから、B の動作“吃”(食べるという動作)の開始について予想がつくはずである。A が再び、食堂以外の場所で再び B と出合った時には、“吃”という動作そのものの発生ではなく、動作の展開の終結が早いということに驚いたのである。発話者の視点が、動作行為の内的展開に置かれていることは明らかである。上述したように、“V 过₁”は「発話コンテキストにおいてに規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現する局面」を表す。しかし、例(20)のコンテキストにおいては、“V 过₁”の生起条件である「二重のイベント構造」が想定され難いため、“V 过₁”が生起しにくいのである。一方、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表すため、その生起が可能である。

2.2.4 コンテキストが設定されない場合

(21) *a. 石油烧过₁了。

b. 他试了很多办法。木头也烧过₁了, 煤也烧过₁了, 石油也烧过₁了, 还是没有找到一种理想的燃料。

(彼はいろんな方法を試した。木も燃やしたし, 石炭も燃やしたし, 石油ももやしたが, 理想の燃料はやはりみつからなかった。)

例(21a)と(21b)を比較されたい。(21a)は狭義のコンテキストが設定されてないのみならず、広義のコンテキストが想定し難いため、「二重のイベント構造」も容易には想定できない。よって“过₁”の生起条件が満たされず、非文法的なのである。一方、(21b)のように具体的なコンテキスト(狭義のコンテキスト)が設定された場合、“烧石油(石油を燃やすこと)”を、例えば「理想の燃料を探すために、様々な方法を試す」という上位イベントを構成

するいくつかの下位イベント（多数の方法）のひとつとして捉えることが可能である。この場合、コンテキストによって規定される上位イベントを構成する下位イベントの一つが実現する局面を表すために、“V 过₁”の生起が可能となる。一方、“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面を表す」という意味機能を有するため、(21b)のような二重のイベント構造が成立するコンテキストにおいては生起し難い。

2.3 “V 过₁”と“V 完”の選択によってニュアンスが異なる場合

以下の例は、“V 过₁”と“V 完”のいずれも生起し得る文である。但し、いずれかを用いるかによってニュアンスが異なってくる。そのようなニュアンスの相違が生ずる理由も上述の“V 过₁”と“V 完”の文法機能の違いを反映したものと解釈できる。ここでは前掲の用例(6)、(7)を用いて考えてみよう。

- (6) a. 这些材料我们一页一页都看过₁了。
 (これらの資料に私たちはもう一頁一頁目を通した。)
- b. 这些材料我们一页一页都看完了。
 (これらの資料を私たちはもう一頁一頁見終えた。)
- (7) a. 一桌子菜我一盘一盘全都吃过₁了。
 (一つのテーブルの料理を私は一皿一皿全部食べた。)
- b. 一桌子菜我一盘一盘全都吃完了。
 (一つのテーブルの料理を私は一皿一皿全部食べ終えた。)

例(6)と例(7)は“V 过₁”と“V 完”のいずれも生起しうる文である。しかし、いずれかを用いるかによって、それぞれのニュアンスが異なってくる。“V 过₁”を用いた例(6a)は「複数の資料を^目を通した」というニュアンスが含まれるのに対して、“V 完”を用いた(6b)は「最初のページから最後のページまで漏れなく見終えた」というニュアンスが含まれる。例(7a)は「料理を一皿一皿味見した」というニュアンスが含まれるのに対して、(7b)は「料理を残さずに食べ終えた」というニュアンスが含まれる。“V 过₁”が生起する(6)と(7)はいずれも受け手の「部分量」の実現と読み取れる。なぜ“V 过₁”は“V 完”とでは上述のようなニュアンスの相違が生じるのか、といった問題について、本稿では、この現象は“V 过₁”の意味機能の特徴と関わるからだと考える。

まず、例(6)と例(7)の受け手に注目すべき特徴がある。両者において主題に置かれたVの動作行為の受け手((6)の“这些材料”(これらの資料)、(7)の“一桌子菜”(ひとつのテーブルの料理))は一つのまとまりとして捉えることができると同時に、全体を細分化して、それぞれ独立する個体として捉えることもできる。受け手を一つのまとまりとして捉える場合、動作行

為も不可分の一回の行為として捉えることになる。一方、受け手の全体を多数の個体に分けて捉える場合、動作行為をも多次にわたる動作行為として捉えることになる。そうすると、上位イベントと下位イベントの成立が可能となる。具体的に言うと、例(6)の“看这些材料”(これらの資料を見る)を上位イベントとすれば、“看材料1, 看材料2……”(資料1を見ること, 資料2を見ること…)を幾つかの下位イベントと見なすことができる。また、例(7)における“吃一桌子菜”(テーブルの上の料理を食べること)を上位イベントとすれば、それを構成する下位イベントは、“吃麻辣豆腐”(マーボ豆腐を食べること)、“吃青椒肉丝”(チンジャオロースを食べること)などであると考えてよいだろう。例(6)と(7)はいずれも、上位一下位という「二重のイベント構造」の成立が可能であるため、“V 过₁”の生起が許される。

そして“V 过₁”が生起する場合、何らかの上位イベントの成立を前提として、その上位イベントを構成する下位イベントの一つが実現したという意味を表す。一方、“V 完”の場合は、動作行為を不可分の一回の行為として捉え、動作の内的展開に着目して、動作行為の〈終結〉を表す。よって、“V 过₁”を用いた(6a)と(7a)は「部分量」のニュアンスが含まれるが、“V 完”を用いた場合、受け手の「全体量」ニュアンスが含まれることになる。

おわりに

本稿は動補構造“V 完”と対照しつつ、動補構造“V 过₁”の意味機能およびその生起条件について考察してきた。

“V 完”は「一つの動作・行為の内的展開の全過程が終結する局面」を表すのに対し、“V 过₁”は「発話のコンテキストにおいてに規定される上位イベントを構成する下位イベントのひとつが実現すること」を表すこと、またその生起条件は発話のコンテキストにおいて「上位一下位といういわば「二重イベント構造」が成立している場合に限る」ということを主張した。「二重のイベント構造」の成立が発話のコンテキストにより規定されるとすれば、“V 过₁”の生起条件は語用論レベルで規定されていることになり、「生起条件の語用論志向」という特徴が明らかになったとも言えよう。

通時的観点から見れば、本稿で考察した結果補語“过₁”は経験アスペクト接辞“过₂”とともに動詞“过”から文法化して生じた二つの形態素であるため、両者が全く関連性はないはずはない。意味機能の面で経験を表す“过₂”と結果補語“过₁”にどのようなつながりがあるのか、また、アスペクト助詞“了₁”も動作の〈完了・実現〉を表すが、“了₁”と“过₁”の具体的な意味機能の差異はどこにあるのか、いずれも興味深い問題である。これらの問題の解明は今後の課題である。

(よう あんな・言語文学専攻)

参考文献

1. 讀井唯允 1996「アスペクトとテンス」,『中国語』第6期:28-31頁。内山書店。
2. 柴谷方良等 1982『言語の構造』「意味・統語篇」。くろしお出版。
3. 朱繼征 1999「中国語の完了相について——“～完”と“～过₁”の文法的使い分けと意味的分析を中心に——」,『中国語学』No. 246:118-125頁。
4. 張岩紅 2006「結果補語“～完”と“～过₁”とについて——“吃完、吃过”“看完、看过”を例として——」,『中国語の補語』:123-143頁。東京:白帝社。
5. 朴鐘漢 1997/2000「認知文法による現代中国語多義語の研究」(遠藤雅裕訳),『中央大学論集』2000年第21号:21-41頁。(原文は「인지문법에 의한 현대중국어의 다의어 연구」『중국언어연구(中国言語研究)』第5集(韓国中国言語学会)に掲載されている。原文未見。)
6. 郭春貴 1988「试论动态助词“过₁”与“了₁”」,『中国語学』No. 235:86-92頁。
7. 孔令达 1986「关于动态助词“过₁”和“过₂”」,『中国语文』第4期:272-276頁。
8. 孔令达 1995「从语言单位的同一性看汉语助词“过”的分合」,『安徽师大学报』第23卷第3期:338-345頁。
9. 刘月华 1988「动态助词“过₂”,“过₁”,“了₁”用法比较」,『语文研究』第1期:6-16頁。
10. 吕叔湘主编 1980/1999『现代汉语八百词』。北京:商务印书馆。
11. 石毓智 1992「论现代汉语的“体”范畴」,『中国社会科学』1992年第6期:183-201頁。
12. 张晓玲 1986「试论“过”与“了”的关系」,『语言教学与研究』1986年第1期:48-57頁。
13. 朱德熙 1982『语法讲义』。北京:商务印书馆。

〈例文出典〉

CCL 语料库,北京大学汉语语言学研究中心。

※出典を明記していない例文は筆者の作例である。